第一話　透明な鎧のきしみ

チャイムが鳴り終わると、教室のざわめきは少しずつ元の場所へ戻っていく。

窓際にはよく話す女子たちがいて、黒板の前には運動部の男子たちがいる。そのどちらにも入らない場所に、わたしの席はあった。教室の隅。光が少しだけ届きにくい場所だった。

出席番号が近づくと、わたしの背中は自然に丸くなる。メガネのフレームが鼻に当たり、きつく結んだ髪のゴムが頭を引っぱる。その感覚が、今日もわたしに教える。

大丈夫。いつも通りにしていればいい。

「三条……ええと」

国語の先生が、そこで少しだけ止まった。

「ジミーですよー、先生」

後ろの席から声が飛ぶ。何人かが笑う。もう、誰も驚かない。先生も困ったように笑って、出席表に丸をつけた。

「……三条茜、はい出席」

わたしは、小さく返事をした。

声はたぶん、先生のところまでは届いていなかったと思う。それでも、返事をしたことに変わりはない。そう思うことにしていた。

メガネ。黒い髪。襟元まできちんと留めた制服。肩をすぼめて歩く姿。

目立たなければ、ひどいことは起きない。誰かの気に障らなければ、やり過ごせる。わたしはそう信じていた。地味でいることは、自分で選んだ守り方のつもりだった。

けれど、その名前だけは、わたしの意志とは関係なく残っていった。

高校一年の春、クラスのＬＩＮＥグループに入れられた。最初は通知も来た。放課後の写真、テストの愚痴、文化祭の話。みんなと同じ画面を見ているような気がしていた。

でも、ある日から話が少しずつ見えなくなった。

文化祭の出し物が、わたしの知らないところで決まっている。昨日の話が、今日の会話の前提になっている。さかのぼって見ると、途中にわたしの名前があった。

「三条って存在感ゼロすぎて笑う」

「お地味ちゃん」

「地味子でよくない？」

「いいじゃんそれｗ」

その少しあと、グループは見られなくなった。

たぶん、新しいグループができたのだと思う。そこに、わたしはいなかった。目立たないようにしていたのに、「地味子」という装いが、わたしより先を歩いていった。

高校を卒業して、わたしは地方の小さな支社に事務職として入った。

社会人になっても、地味でいることは少し役に立った。強く叱られることも少ない。無理に飲み会へ誘われることもあまりない。わたしは電話を取り、資料を作り、コピー機の紙詰まりを直した。誰かの小さなミスを、黙って拾うことも多かった。

「助かるよ、三条さん」

そう言われるたび、わたしは便利な道具になったような気がした。でも、道具でいれば、少なくとも邪魔にはならない。そう考えるほうが楽だった。

月末に、請求書のことで問題が起きた。

先方から、届いていないという連絡が何件も入った。営業フロアがざわつき、部長がわたしの机まで来た。

「この案件の請求書、出力と発送までやってもらってたよね」

差し出されたファイルには、わたしの字で書いた付箋が貼られていた。あの日のことは覚えていた。残業して封入し、宛名を確認し、郵便袋に入れて、担当営業に渡した。

「はい。集荷にも立ち会いました」

「でも、届いていないらしい。どこかで漏らしたってことはない？」

その言葉は、静かだった。けれど、逃げ場のない静かさだった。

「確認不足ということになると思う。上には一応、報告しておくから」

わたしはうなずいた。

「……申し訳ありませんでした」

本当は、言いたいことがあった。けれど、言葉にすると、もっと面倒なことになる気がした。いつものように、飲み込んだ。

その日の午後、コピー機の前で後輩たちの声が聞こえた。

「やっぱ、ああいう地味だけど、もくもくとやる人に重要案件ってリスクだよね」

「声も存在感も薄いし、逆に不安になるよね」

「もくもくちゃんw」

地味子。

高校の教室に置いてきたはずの言葉のニュアンスが、ここにもあった。

制服がスーツに変わっても、場所が変わっても、その装いはわたしを見つけた。静かに、正確に、こちらを指さしていた。

数週間後、わたしは退職願を出した。

部長は「もったいないね」と言った。けれど、本気で引き止めているわけではないことは分かった。その温度が、少しだけ楽だった。

送別会は、みんなの予定が合わないという理由でなくなった。代わりに花束と、寄せ書きをもらった。

お疲れさま。

ありがとう。

またどこかで。

同じような言葉が並んでいた。その中に一枚だけ、『またどこかで会いましょう』と書かれた付箋があった。不思議と目に留まったが、誰が書いたのかは考えないことにした。

退職してからの数日間は、時間がやわらかく感じられた。

朝礼もない。終電もない。昼前に起きて、洗濯をして、夕方のスーパーで半額の惣菜を買う。
誰にも呼ばれない日々に、身体はすぐ慣れた。

でも、二週間ほどたつと、その静けさは少し重くなった。

部屋には、やらなければならないことも、怒る人もいない。
スマホだけが、外の世界とつながっている細い糸だった。

眠れない夜、元同僚の投稿が流れてきた。

居酒屋の写真だった。
赤い提灯。並んだジョッキ。笑っている人たち。
そこには、見慣れた顔がいくつもあった。

コメント欄を開く。

『久々に全員集合〜！』

『ひとり足りなくない？笑』

『あー、三条さん…だっけ？』

『そうそう。まだ生きてるかな笑』

しばらく、画面を見たまま動けなかった。

感情より先に、音が消えた。部屋の空気が遠くなって、スマホの光だけが妙にはっきりしていた。

地味。

また、その装いがコメント欄にもあった。

目立たなければ大丈夫だと思っていた。静かにしていれば、通り過ぎてもらえると思っていた。けれど、そうではなかった。

わたしが小さくなればなるほど、誰かはそこに印象をつける。
見えるものには、都合のいい形が与えられる。

スマホを裏返して、枕の横に置いた。

天井を見上げる。暗がりの中で、自分が少しぼやけているように感じた。
輪郭がなくなるように。

まだ生きてるかな。

その言葉に、何か返したかった。
でも、声は出なかった。

その夜、わたしは静かに理解した。
目立たないという装いは、わたしを守らない鎧だった。ただ、きしむ音を聞こえにくくしていただけだと。

第二話　偽りのディレイ

仕事を辞めてから、曜日の感覚はすぐに曖昧になった。

朝、目が覚めても、行くべき場所はない。スマートフォンの時計を見る。十一時四十五分。カーテンの隙間から床に落ちる白っぽい光だけが、昼に近い時間を教えていた。

最初の一週間は、それでも少し息がしやすかった。
アラームに起こされることもない。
満員電車に押し込まれることもない。
ただ眠り、起きて、また眠ればよかった。

けれど二週目に入ると、自由は空白に変わった。布団から出る理由を、毎朝ひとつずつ探さなければならなくなった。

昼過ぎ、胃のあたりが重くなって、わたしは近所のコンビニへ向かった。自動ドアの前に立つと、ガラスに自分の姿が映った。

猫背の薄い肩。無造作に結んだ黒髪。色あせたグレーのカーディガン。会社からそのまま持ち帰ってきた支給品を、組み合わせたような装い。

そこに映るわたしは、わたしが思っているよりずっと、くたびれて見えた。

急いで目をそらして、店に入る。会計を済ませて外へ出ると、今度は道路脇の車の窓に、ぼんやりした女が映っていた。一瞬、誰だろうと思ってから、それも自分だと気づく。

ガラスは、街のあちこちにあった。エレベーターの鏡。ドラッグストアのショーケース。駅ビルの壁。そのどれにも、輪郭の薄い女が貼りついていた。

部屋に戻るころには、足がひどく重かった。鍵を閉めると、ようやく世界から切り離されたような気がした。靴を脱ぎ、そのままベッドに倒れ込む。シーツの音だけが、部屋に大きく響いた。

天井を見ながら、スマートフォンを開く。料理の動画。知らない人のペット。短い笑い声。指だけが勝手に画面を送っていく。

しばらくして、検索窓に文字を打った。

『垢抜』

二文字を入れたところで、少し手が止まった。自分の惨めさを認めるようで、胸がざらつく。それでも、予測変換は容赦なく次の言葉を出してくる。

『垢抜け　方法　地味』

検索すると、明るいサムネイルが画面いっぱいに並んだ。

人生が変わった。地味顔から逆転。ポイントを押さえ別人に。

太い文字と、強い光を当てられたビフォーアフターの写真。どれも気持ちには少し眩しかった。わたしは場違いな気持ちのまま、再生回数の多い動画をひとつ開いた。

画面の中の女性は、同世代くらいだった。明るいスタジオで笑いながら、骨格診断、パーソ

ナルカラー、顔タイプという言葉を滑らかに並べていく。

丸首よりVネック。ゆるい服より、直線のあるジャケット。くすんだ色より、顔色を明るく見せる色。

わたしは、自分のクローゼットを思い浮かべた。無難なベージュのシャツ。量販店のカーディガン。目立たないことだけを基準に選んできた服ばかりだった。

さらに動画を送っていると、少し違うサムネイルが目に入った。

『声の周波数で第一印象は変わる』

『姿勢が変わると“別人”に見える』

再生すると、スーツ姿の男性がホワイトボードの前に立っていた。ボイストレーナーらしいその人は、落ち着いた声で話し始めた。

人は、顔の造作だけで相手を判断しているわけではない。声、話し方、姿勢。その情報の組

み合わせで、相手の印象を一瞬で決めている。

男性は、同じ「はじめまして」を二通りの声で言った。高く、喉の奥が詰まったような声。低く、胸に響くような声。

言葉は同じなのに、画面から受ける印象はまるで違った。

「顔そのものを変えなくても、出力する輪郭として声と姿勢を意識して、変えればいいんです」

その言葉が、胸の奥に残った。

わたしは無意識に、ベッドの上で背中を伸ばしていた。肩甲骨を寄せる。胸を少し開く。いつもより多く空気が入ってくる。

インカメラを起動する。液晶の中に、見慣れた薄い顔が映った。けれど、肩を下げ、あごを少し引くだけで、その下にある空気がわずかに変わるのが分かった。

そのあと、美容整形の動画もいくつか見た。鼻筋を高くする。二重の幅を変える。骨を削る。

画面の中では、少女たちが別人のように笑っていた。

頬に指を当てる。ここを変えれば、わたしもあちら側へ行けるのだろうか。

けれどすぐに、費用や痛みや失敗のことが浮かんだ。わたしには、その一歩を踏み出す勇気も、資格もない気がした。

スマートフォンを持つ手から力が抜ける。代わりに、さっきの言葉だけが暗い部屋に残った。

顔ではなく、出力を変える。

わたしは膝を抱えて座り直し、もう一度インカメラを見た。

猫背をやめる。猫肩を落とさない。猫あごを引く。猫視線を正面に置く。

息を吸って、吐きながら、小さく言った。

「……わたし」

いつもなら消えてしまう声を、少しだけ前に押し出す。

画面の中にいるのは、たしかにわたしだった。けれど、その中にほんの少しだけ、知らない誰かの気配が混ざっていた。

顔の造作は変えられない。でも、他人に差し出す情報なら、今からでも変えられる。声は訓練できる。姿勢も、きっと変えられる。

ベッド脇の引き出しから、余っていた無地のノートを取り出す。白いページの一行目に、ゆっくりと書いた。

『顔ではなく、輪郭と声の出力を再構築する』

黒い文字を見つめていると、胸の奥に小さな熱が灯った。吹けば消えそうな火だった。それでも、昼間コンビニのガラスに映った影とは、少し違う色をしていた。

わたしはノートを閉じ、もう一度スマートフォンを手に取った。

『オンライン　姿勢　解剖学』

『ボイストレーニング　音声学　基礎』

画面の向こうで、知らない誰かが笑っている。

わたしはその笑顔を眺めながら、まだ世界が知らない「自分」を暗闇の中で静かに描き始めようとしていた。

第三話　主観と客観の呪文

オンライン骨格診断の申し込みボタンを押すとき、わたしの指先は画面の光の中で少し震えていた。画面に並ぶ受講生の「ビフォー」の女性たちは、どこか現在のわたしに似ていた。

カメラを起動すると、部屋着のスウェットを着た自分が映った。慌てて照明を明るくし、最低限のメイクをして髪を整える。

電子音が鳴り、画面が二つに分かれた。右側に現れたのは、ネイビーのブラウスを着た女性だった。柔らかい目元をしているのに、声は明瞭で迷いがない。

今日は骨格とパーソナルカラーを見ていく、という説明のあと、自己診断を聞かれた。わたしは、骨格はストレートで、カラーはサマーだと思っていると答えた。

まずは骨格診断だった。カメラから離れ、全身が映るように立つ。講師の視線が、肩、腰、手首を画面越しに静かに測っていく。

「ストレート寄りのミックスですね。首元の詰まった丸首や、薄くて柔らかいカーディガンは、あまり得意ではありません」

事前に送った私服写真が表示される。ベージュの丸首シャツ。ゆるいグレーのカーディガン。目立たないために選んできた服だった。

「こういうお洋服が多いですか」

「はい。無難だと思ったので」

「でも、無難に見えるものが、その人の良さを消すことはよくあります」

その言葉が、胸の奥に残った。

「三条さんは、首元を少し縦に開けるとすっきりします。Vネックや浅めのスクエア。肩は落とさず、厚みとハリのある素材が合います。大きめのニットは、のっぺりした地味さを強調しやすいです」

のっぺりした地味さ。その言葉に息が止まる。けれど、傷つくより先に納得があった。わたしは目立たない服を着ているつもりで、自分の影をさらに薄くし強調していたのかもしれない。

次に、パーソナルカラーへ移った。講師は、肌の色、髪の明るさ、瞳の色を静かに観察した。

「肌は少し黄みがあります。ただ、赤みも出やすい。瞳は柔らかいブラウンで、髪も真っ黒ではありません。スプリング寄りのイエローベースですね」

スプリング。

聞き慣れないほど明るい言葉だった。

「黒、グレー、ネイビーばかり選んでいませんでしたか」

「多かったです。失敗しないと思って」

「悪目立ちはしません。でも暗い色は顔色をくすませます。疲れて見える地味さのある印象になりやすいんです」

疲れて見える地味さ。コンビニのガラスに映っていた自分の顔が浮かんだ。あれは顔そのものだけではなく、選んできた色のせいでもあったのかもしれない。

講師はカラーボードを見せた。アイボリー、コーラル、キャメル。どれも、わたしが避けて

きた色だった。首元に持ってくると顔に光が入る。メイクもコーラル系が合う。わたしは品番と色名をメモした。

そのあと、講師とオンラインショップを見た。カートには、淡いベージュのジャケット、明るいキャメルのスラックス、コーラルのトップスが入っていく。

「わたしには派手すぎる気がします」

「三条さんには、これくらいで普通です。無難な服を着ているから印象が薄く見える。それは、かなり大きいです」

数日後、段ボールが届いた。テープを切ると、明るい色が静かに現れた。本当に、わたしが着ていいのだろうか。それでも、もう戻る理由はなかった。

トップスをかぶり、スラックスに足を通し、ジャケットの袖に腕を入れる。姿見の前に立った。

そこにいたのは、たしかにわたしだった。けれど、教室の隅で俯いていた地味子でも、書類棚の影にいたもくもくちゃんでもなかった。

首元の開きは顔まわりをすっきり見せ、ベージュとキャメルが頬に少し光を戻している。目の下の影も、いつもより薄く見えた。

鏡の中の人物と目が合う。知らない誰かに見返されているようだった。でも、その目の奥には、教室の笑い声も、コピー機の前のひそひそ声も、全部覚えているわたしがいた。

もし、あの人たちがこの姿のわたしを街で見たら、すぐに三条茜だと分かるだろうか。

骨格と色。その二つの呪文をまとったわたしは、彼らの記憶にある地味子から、少しだけずれていた。人は、目に入った情報を過去のパターンで処理する。いつもと違う形。いつもと違う色。小さな違和感が重なれば、相手の中のフォルダは一瞬、開かなくなる。

「……こんにちは」

鏡の中の新しい自分に、挨拶をするように。

その人は、まだ完全な別人ではない。けれど、地味子と呼ばれた女の影から、一歩だけ外に出ていた。

出力する情報を変えれば、世界を少しだけ騙せる。
そんな静かな確信が、胸の奥で、確かに形を成し始めていた。

第四話　周波数のチューニング

骨格と色のロジックで、クローゼットの中身を入れ替えた。鏡の中のわたしは、過去からほんの数ミリだけ外側へずれていた。

けれど、まだ大きな隙間がある。

口を開いた瞬間に。その、いつもの一声が、相手の脳は「いつもの三条茜」を思い出す。色も形も、姿勢も、すべて一瞬でほどいていく。そう思うと、胸が冷たくなった。

わたしは、以前ブックマークしていたオンラインのボイストレーニングを開いた。録音とフィードバックを重視しているという説明を読み、体験レッスンの申し込みフォームに名前を入力した。

数日後、初回レッスンが始まった。画面の向こうに現れたのは、チャコールグレーのシャツを着た男性講師だった。話し方は静かで、無駄がなかった。

「はじめまして、三条さん。今日はよろしくお願いします」

「よ、よろしくお願いいたします」

自分の声が、喉の奥で引きつった。少し高く、頼りなく聞こえる。講師はそこには触れず、淡々と進めた。

「まず、現在の声を確認しましょう。こちらの文章を、いつも通り読んでください」

画面に表示された短い文章を、わたしは声に出した。録音されていると思うだけで、舌の動きがぎこちなくなる。喉が狭くなり、語尾が勝手に消えていった。

読み終えると、講師は音声を再生した。

スピーカーから流れた声は、想像よりずっと細かった。高く、息が混ざっていて、言葉の端が小さく震えている。早口なのに力がなく、文の終わりはいつも尻すぼみだった。

自分の声なのに、遠くの、怯えた誰かの声を聞いているようだった。

「聴いてみて、どう感じましたか」

「思ったより、高くて……早いです。ずっと同じ調子で、弾力がないような。そう聞こえます」

「的確です」

講師は波形の画面を見せた。

「今の三条さんの声は、ピッチが高く、線が細く、速度が速い。この三つが重なると、聴く側は無意識に『自信がなさそう』『軽く扱ってもいい』と判断しやすくなります」

その言葉は静かだった。けれど、ひどく正確だった。

「声は、喉だけで出すものではありません。身体全体を楽器だと思ってください。声帯は弦で、骨格は箱です。いまは浅い場所だけで鳴らしているので、音が薄くなっています。もう少し、胸とお腹のほうへ響きを下ろしましょう」

講師の指示で、お腹に手を当てて息を吸う。胸ではなく、へその下を膨らませる。普段使っていない場所が、ゆっくり動くのが分かった。

「その息に声を乗せてください。喉を締めずに、『まー』と伸ばします」

わたしは、言われた通りに声を出した。最初は震えた。けれど何度か繰り返すうちに、音が喉ではなく、身体の内側から前に出ていく感覚があった。

「いまの響きです。そこを覚えてください。そこが新しい出力ポイントです」

新しい出力ポイント。

その言葉を、わたしは頭の中で繰り返した。

もう一度、最初の文章を読む。今度は少し低く、少し遅く。息をお腹で支え、語尾を消さないようにする。

録音を再生すると、さっきとは違っていた。完全な別人ではない。けれど、あの細くて頼り

ない感じは、少し削れていた。

「落ち着いて聞こえます」

自分でそう言うと、講師は小さくうなずいた。

「人は、声の高さや速度から相手を分類します。これまでの声は、遠慮がちで踏み込んでもよさそうな印象を与えやすかった。でも、周波数を下げ、速度を整えれば、冷静で不用意に踏み込めない人という別の分類に入ります。声も、他人の認知を変えるコードです」

コード。

その言葉が、胸の奥に沈んでいった。

見た目だけではなく、声も変えられる。他人の脳に届く情報を、こちら側で少しずつ書き換えられる。

レッスンの終わりに、毎日一分、自分の声を録音して聞き返す宿題が出た。

それから数日、わたしは部屋で短い音声日記を録り続けた。最初は自分の声を聞くたびに、少しだけ嫌悪感があった。けれど、だんだんと新しい響きの位置が身体に馴染んでいくのが分かった。

ある夜、それが本当に他人に伝わるのか確かめたくなった。

連絡先を開く。

会社関係の名前は、もう消してある。残っている少ないリストの中から、地元の幼馴染の名前を選んだ。彼女だけは、わたしを「地味子」と呼ばなかった。

通話ボタンを押す。数回のコールのあと、聞き慣れた声がした。

「あかね？」

わたしは息を吸い、胸の奥を響かせるようにして、ゆっくり言った。

「もしもし。いま、少し大丈夫？」

向こう側が、一瞬静かになった。

「……え、ごめん。一瞬、間違い電話かと思った。あかね、声どうしたの？」

心臓が重く鳴った。

「そんなに変かな」

「変っていうか、本当に分からなかった。いつものあかねより低くて、落ち着いてる。大人っぽいっていうか」

指先が静かに熱を帯びた。わたしは声の高さを崩さないように、慎重に言葉を選んだ。

「話し方のレッスンを受けていて。変わっているか、確かめたかったの」

「…電話だけだったら、別人って言われても信じるかも」

通話を終えると、部屋はまた静かになった。

わたしは暗い窓ガラスを見つめながら、彼女の言葉を何度も思い返した。

最初、誰だか分からなかった。

その事実だけで十分だった。

声の周波数を少し変えるだけで、相手の中にある「三条茜」のフォルダは、一瞬開かなくなる。そこに、確かな手応えがあった。

姿勢を直す。

骨格に合う服を着る。

色で肌の見え方を変える。

そして、声の出力を変える。

ひとつずつ、静かに組み替えていくパーツの群れが、わたしの内側で、まだ誰も見たことのない新しい誰かとして、少しずつ形を持ちはじめていた。